

分科会	小6年②	郡市名	岡 崎
提案者	岡崎市立 羽根小学校		吉見 明

1 研究主題

社会に参画していこうとする子どもの育成をめざし、仲間とかかわりながら問題解決を図る社会科の授業
—6年「安心安全な街を目指す羽根学区とそれを支える岡崎市」の実践を通して—

2 はじめに

岡崎市社会科部では「社会に参画していこうとする子どもの育成をめざし、仲間とかかわりながら問題解決を図る社会科の授業」をテーマとして授業研究に取り組み、今年度で5年目になる。昨年度までの研究を通して、身近な事象を手掛かりに問題を捉え、様々な人や友達との話し合いによって問題の追究をすることで、仲間とかかわりながら問題の解決を図る子どもの姿が見られた。その一方で、子どもの追究活動と社会参画の育成をどのように結びつけるかが課題として挙げられる。これらの成果と課題から、今年度は問題の解決を目指すことで、よりよい社会づくりに貢献しようとする子どもの育成を目指して実践を行う。

3 研究の基本的な考え

(1) 研究単元の設定理由

南海トラフ巨大地震が今後30年のうちに70%の確率で起こると言われており、岡崎市では災害に備えた取り組みを進めている。議会でも防災に対する議論が進められ、平成24年度までに全小学校に防災倉庫を設置、今後中学校も拡充されていくことが決まっている。しかし、限られた予算で全ての災害対策を行うことは難しく、行政による「公助」の限界が浮き彫りとなっている。

羽根学区に目を向けると、各町内が防災訓練を行っている。また、婦人自主防災クラブで17年に渡って会長を務める赤平さんは、毎年PTA作品展に合わせ防災グッズや婦人自主防災クラブの活動を地域の人や子どもたちに紹介し、地域の防災意識をさらに高めようとしている。これまでに大きな災害に見舞われたことはないものの、地域の人々の防災への意識が高い。さらに、市が様々な情報提供や補助金で地域の活動を支えている。

以上のことから、防災への取り組みとその課題の追究や、課題の解決に向け活動する人々とかかわることで、問題の解決を目指し、社会に参画しようとする子どもの育成につながると考え、本単元を設定した。

(2) 研究主題のとらえ

「社会に参画していこうとする子どもの育成をめざし、仲間とかかわりながら問題解決を図る社会科の授業」を次のように捉えた。

●社会に参画していこうとする子ども

「社会に参画していこうとする子ども」とは、「よりよい社会の実現のために、自ら問題の発見・追究をし、仲間とかかわりながら解決を目指そうとする子ども」と捉える。本研究では、よりよい社会を「地震災害から多くの命と生活を守る社会」とし、よりよい社会を実現するため、課題の解決方法を模索し、様々な立場の人とかかわろうとする姿や自分の考えを主張する姿を社会に参画していこうとする姿と捉える。

●仲間とかかわりながら

「仲間」とは、「学びを通してかかわる全ての人」と捉える。即ち「仲間とかかわる」とは、「学習の対象となる人から話を聞くことや、自分の考えを伝えること。そして、その調べを基に友達と話し合うこと」とする。本研究では、問題を解決するために友達と話し合う姿や、ゲストティーチャーである市議会議員、総代会長、婦人自主防災クラブ会長から話を聞いたり、自分の考えを伝えたりする姿と捉える。

●問題の解決を図る

「問題の解決を図る」とは、「社会事象に出会ったときに生じる課題を追究や話し合いにより解決していくこと」と捉える。本研究では「災害から人々を守るために、市はどのような準備をしているのだろう」を単元を貫く課題とし、市の防災施設や行政の取り組み、地域の活動等を追究することで、行政の努力とその課題、地域の活動、及びその取り組みに携わる人々の思いを理解する姿と考える。

(3) 目指す子ども像

- ・地震災害に関する教材や、市政に携わる人とかかわりを通して、市の防災への取り組みとその課題を身近な問題として捉えることができる子ども
- ・地域の活動やその活動に携わる人々の思いにふれながら課題に対し粘り強く追究することを通して、よりよい社会を実現するために自ら問題を解決しようとする子ども

(4) 研究の仮説

目指す子ども像から次のような研究仮説を設定した。

- 仮説 1** 災害を身近な問題と感じられる社会事象の教材化や、子どもの思考に合わせた仲間とかかわる場の設定をすれば、市の防災における課題を身近な問題として捉えることができるであろう。
- 仮説 2** 資料について考える時間を十分に確保し、地域の活動や活動に携わる人の思いに触れながら粘り強く問題を追究させれば、よりよい社会の実現のために問題の解決を目指すであろう。

(5) 研究の手だて

仮説 1 に対する手だて

① 災害を身近な問題と捉えられるような単元の導入の工夫

単元の導入に、熊本地震の被害状況が分かる写真や数値、東南海トラフ巨大地震の被害想定を示す映像を提示し、岡崎市でも、地震による大災害が起こる危険性があることに気づけるようにする。

② 市の防災への取り組みを身近な問題と捉えるための、「人」「物」との出会いの場の工夫

校内にある防災倉庫の見学や学区内にある防災施設、ゲストティーチャーとして鈴木市議会議員を子どもの思考の流れに合わせて登場させることで、市の防災への取り組みやその課題について追究しようとする意欲を高める。

仮説 2 に対する手だて

③ 市の防災対策に対する批判的吟味をする場の設定

防災施設の見学や、市議会議員から聞いた話を基に「本当に岡崎市の防災対策が大丈夫なのか」について話し合う場を設定することで、資料を多面的に捉え粘り強く問題を追究できるようにする。

④ 防災に取り組む地域の人と交流する場の設定

ゲストティーチャーの佐藤総代会長や赤平婦人自主防災クラブ会長から地域の防災活動について話を聞く機会を設定することで、よりよい社会の実現のために、市と地域住民が連携して、災害に強い学区づくりを進めていることに気づくようにする。さらに「災害から多くの命や生活を守るために必要なこと」について友達や地域の方と話し合う機会を設けることで、地域社会の一員としての自覚を高め、問題を解決し、より良い社会の実現を目指したいという思いを高める。

(6) 抽出児童の設定

A児は知識が豊富で自分の意見をはっきりと主張することができる。しかし、学校生活での様子や授業の発言を聞くと、自分中心の発言が目立つ。また、地域の行事にはあまり参加せず、地域社会に関わろうとする気持ちも薄い。本単元で多くの仲間と関わる経験を通して、様々な立場の人の気持ちを考え、社会をよりよくしていこうとする姿が見られるようになってほしい。

(7) 単元の目標

- ①南海トラフ巨大地震のシミュレーションを通して地震に対する危機意識をもち、防災に対する学区の人々の願いと行政とのかかわりについて興味をもつことができる。(社会事象への関心・意欲・態度)
- ②限りある市の予算を防災のためにどのように活用するかを考え、学区の人に自分の考えを発表することができる。(社会的な思考・判断・表現)
- ③ゲストティーチャーの話や調べた資料をもとに、学区の人々と行政がどのようにかかわりあっているのかを図でまとめることができる。(観察・資料活用の技能)

(8) 単元構想 (11 時間完了)

子供の意識の流れ・学習課題		教師の支援
地震が起きたときのシミュレーションをしよう ①、②		・熊本地震の被災状況を表す資料、写真を提示する →手だて① ・南海トラフ巨大地震のシミュレーション動画を
熊本地震から分かること ・避難生活には多くの物資がある ・道路が寸断し物資が届かないこともあった ・物資が足りず生活に困る人がたくさんいた	南海トラフ巨大地震から分かること ・30年以内に70%の確率で起こる ・広大な範囲で被害が出る ・国からの支援が遅れる可能性もある	

<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;">僕たちの町は大丈夫なのかな</div>		視聴する →手だて①
災害から人々を守るために、市はどのような準備をしているのだろう		
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">羽根学区にある市の防災施設を調べよう③</div>		<ul style="list-style-type: none"> ・防災倉庫を見学し、倉庫の中身のリストを配付する →手だて② ・市の防災対策について話し合い、自分の考えを明確にする →手だて③ ・鈴木議員を招き、行政の役割、税の仕組みを学ぶと共に、質問に答えてもらう →手だて② ・鈴木議員の話をもとに、市の取り組みについて再度話し合う →手だて③ ・佐藤さんから地域の共助の取り組みや市と地域の関わりについて話してもらう →手だて④ ・赤平さんから市との関わりや、市に要望した時の話を聞く →手だて④ ・学習をもとに、災害時に必要な物資や対策について話し合い、社会に参画しようとする意識を高める →手だて④
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">市内の防災対策はこのままで大丈夫か考えよう④</div>		
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; width: 50%;">心配</div> <ul style="list-style-type: none"> ・水や食糧が足りず心配 ・もっと必要な物がたくさんある 	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; width: 50%;">大丈夫</div> <ul style="list-style-type: none"> ・誰か助けてくれると思う ・イオンがある。なんとなる 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">鈴木議員に相談してみよう⑤、⑥</div>		
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">このままで大丈夫なのかな。地域の人はどう思っているのだろう</div>		
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">総代会長佐藤さんに相談してみよう⑦</div>		
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">婦人自主防災クラブの赤平さんに相談してみよう⑧⑨</div>		
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">災害から町を守るために必要なことを提案しよう⑩⑪</div>		
<ul style="list-style-type: none"> ・災害が起きていちばん困る人を守るためにはどうすればいいのかな ・お願いすべきことは「物」だけではないんじゃないかな ・限られた予算を有効活用するためにはどうすればいいのだろう ・みんなで話し合うと良い案が浮かぶね ・自分なりに調べたり行動したりした上で自分の考えを主張していくことが大切なんだ 		

5 研究の実際

(1) 地震が起きた時のシミュレーションをしよう (第1、2時)

単元の導入では、各委員会の活動の様子を取り上げながら「もし、羽根学区でも巨大地震が起きたらどうなるかシミュレーションしてみよう」と声をかけた。子どもたちはまず手だて①熊本地震の被災状況や避難生活についてインターネットの写真資料や新聞記事から調べ学習を行った。電柱が折れた道路、水の配給を受けるため並ぶ人たち、施設の廊下で避難生活を送る人たちの写真を見て、子どもたちは「大変だ」「この状況で生活するのは嫌だな」とつぶやいていた。

調べて分かったことを話し合う前に、地震に対する危機意識を高めるために手だて①内閣府が公表している「南海トラフ巨大地震シミュレーション動画」を視聴させた。視聴し終えた子どもは誰も言葉を発しなかった。太平洋側を中心に広範囲で甚大な被害が出ることや、被害想定地域に自分たちの街も含まれていることに気づき、地震に対する恐怖心や生活への不安な気持ちが芽生えたようだ。

子どもの意識を高めたうえで、本時の課題を提示し、災害時にどのような被害がでるのかについて話し合った。地震による被害では、「建物や道路、線路が壊れる」「電気や水が届かなくなる」との意見が出た。続けて生活への影響について話し合いを進めると、被害によって「食料・水が足りない」「家族との連絡できなかったり会えなくなったりする」「家で生活できないかもしれない」と発言した。熊本地震、南海トラフ巨大地震の学びを通して、地震によって生活に大きな被害が出ることで、避難生活を送るうえで様々な物資が必要となることに気づくことができた。

話し合いが進む中で、避難生活の物資に着目し、「これらの必要な物資は誰が用意するの」と発問をした。それに対し、子どもたちは「自衛隊、国、県から物資が届く」と発言したので、【資料1】熊本地震において、物資があるにも関わらず、道路の寸断や物資輸送の手段の制限によって、県から地方自治体に支援物資が届かない記事を子どもに提示した。困ったときはすぐに誰かが助けてくれるという考えにゆさぶりをかけた。この記事を読み、子どもたちからは「じゃあだれが助けてくれるのかな」「市かな」「地域とかお母さん」とつぶやき始めた。ここで、教師から「市が災害に備えて、羽根小学校の中に様々な物資を保管しているよ。」と発言し、子どもたちの意識を市の取り組みと防災倉庫に向けさせ、単元を貫く課題である「災害から人々を守るために、市はどのような準備をしているのだろう」につなげた。【資料2】は第1、2時の終末にA児が書いた社会日記である。



【資料1】熊本県庁で滞った物資
2016.4.19 東洋経済オンライン記事より

第1時：大地震が羽根学区で起きたら町がボロボロになりそう。場所的に津波はこないと思う。

第2時：学校など、市が管理している施設には防災倉庫があるみたい。でも、(避難生活を送るためには、準備する)量がたくさん必要だと思う。

【資料2】第1、2時のA児の社会日記

「大地震が羽根学区で起きたら」と書いているように、地震を身近な問題として捉え始めていることが分かる。また、熊本地震の様子から、避難生活には様々な物資が数多く必要であることを捉え、物資の量に注目しながら学習していこうとする姿が感じられる。A児以外にも、多くの児童が避難生活に必要な物資を市がどれだけ準備しているのかに興味をもつことができた。

(2) 羽根学区にある市の防災施設を調べよう (第3時)

第3時では、手だて②防災倉庫の見学をおこなった。見学をする前に、子ども達に防災倉庫の中身について話し合わせた。その際、予想する際の目安となる情報として、防災倉庫の大きさ、羽根学区に住む市民の人数、防災危機管理課の方の話(市は避難してきた人が2~3日生活できるための物資を保管している)の3つを子どもたちに伝えた。【資料3】は防災倉庫の中身について話し合った際の授業記録である。前時までの学習をもとに、避難生活に必要な物資を予想し、「水」「紙おむつ」「カイロ」「非常食」「毛布」などを発表した。また、被災時の物資不足についても学習したため、かなり多めの数量を予想している。

予想について話し合った後、防災倉庫を見学した【資料4】。中身は食料や水のほかに、ハロゲン投光器、コンポーターハンマーなど全34種類の物資が整頓して保管されていた。また、食料には賞味期限がすぐに分かるよう目立つ場所に日付が書かれていることなど、見学して気付いたことをノートにまとめた。【資料5】は見学後のA児の社会日記である。

思っていたより数が少なかった。賞味期限もちゃんと書かれていた。(賞味期限の)部分が修正されているものもあったから、ちゃんと点検しているんだなと思った。私の家では、災害に備えて準備してあったかな。心配です。

【資料5】第3時のA児の社会日記

- C1 水 100リットル (えっ?足りる?)
- C2 紙おむつが 1000個くらい(多くない?)
- C3 カイロ 100枚 (ありそう)
- C4 非常食 1万食
- T8 何が入ってると思う?
- C5 乾パン
- C6 毛布 1000~2000枚
- C7 消火器 50個 (50個も?)
- C8 担架が 20個くらい
- C9 懐中電灯 200個
- C10 ブルーシート 100枚
- C11 ラジオ 100
- C12 紙コップ 1500。あと充電器
- C13 水 2万4千リットル (1万2千本) かさばらないようタンクに入っている。
- C14 救急用品。大きい箱にたくさん
- C15 段ボール 100個
- C16 発電機が 100
- C17 新聞紙 500日分。使い道も書いてある。
- C18 水 1万8千。

【資料3】第3時の授業記録



【資料4】防災倉庫を観察する子ども

見学前の予想を大きく外していたことがこの日記から分かる。そして、第1、2時には見られなかった「心配という自分の気持ちが書かれている」。A児以外の子どもたちも、物資の量の少なさにかなり驚いていた。困った時は、市など周りの人が助けてくれるはずという思いが崩れ、大災害

に対応できないかもしれないという危機感が高まり始めた

(3) 市の防災対策はこのままで大丈夫なのか考えよう (第4時)

第4時では、A児のように第3時の社会日記で多くの子どもが「地震が起きたら心配」と答えたことから、「岡崎市の防災対策はこのままで大丈夫だろうか」という課題をもとに話し合いを行った。

導入では、手だて②地域にある市の防災施設を紹介した。子どもたちは、シビックセンターに小学校より大きな防災倉庫と貯水槽があることを知った。小学校と同じ防災倉庫が翔南中学校にはあるが、南中学校にはないことが分かり、南中学校へ進学する子どもたちからはかなり驚きの声が上がっていた。

これらの活動を踏まえて、手だて③岡崎市の防災対策について討論を始めた。心配と答えた子どもが32人、大丈夫と答えた子どもが6人という結果だった。【資料6】はこのときの授業記録である。心配な理由は、「防災倉庫の中にある物資が少ない」「場所によって防災倉庫が設置されていない」「道路の寸断など、交通に影響がでた場合に避難生活が困難になる」と発言した。一方、大丈夫な理由は、「耐震化が進んでいる」「近くにイオンがある」ことを挙げた。話し合いを進める中で、どちらの意見においても、市が保管している物資だけでは足りないという意見は同じであることが分かった。そこで、「地震を乗り越えるために、市に要望したいことは何かあるか」と尋ねると、【資料7】にある意見を発言した。物資の補充をお願いする子どもが多いなかで、災害時のイオンの営業など災害時の対応についての意見も見られた。教師はできるだけ子どもの思考を否定しないようにしながら子どもたちの意見を認めるようにした。

- C4 羽根学区は人数が多いから物資の数が心配
 - C5 そもそも、防災倉庫がないなんて、物が足りない
 - C6 羽根小や翔南にはあるけれど、南中、公園には防災倉庫がないから道が壊れたら物資が足りなくなる
 - C7 南海トラフの地震は生活する物がぐちゃぐちゃになるから生活できない
 - C8 南中に大勢の人が集まるのに防災倉庫がない
 - C9 南中に防災倉庫がない理由は、イオンが近くにあるから？
 - C10 心配。防災倉庫の中身も2、3日分しかない
 - C11 施設の耐震化が進み、避難場所は崩れないから大丈夫自分の家も崩れないと思う
 - C12 イオンが近くにあって、食料がたくさんあるから大丈夫
 - T11 なんでイオンがあると大丈夫？
 - C13 服とか食料とかいろいろなもの置いてあるから
 - C14 イオンとか西友があれば、あったかい物が手に入る
 - C15 たぶんイオンが学区の人には商品を配給してくれる
 - T12 イオンとか開いているのかな？だれか知っている？
 - C16 確か熊本地震は全然開かなかっただらいいよ
 - T13 何が一番心配？
 - A児 (倉庫には) ビスケットとかおかしかな
 - C18 A児に似てて、羽根には1万2千人以上住んでいるのに、その人数を賄う食料がない
 - C19 非常食の中に氷砂糖もあったけれど、非常食氷砂糖は嫌だな
- 【資料6】 第4時の授業記録

子どもたちの要望を一通り聞いた後、「みんなの要望を思い切って市の人に聞いてもらおう。次回は市議会議員さんが来ます。市議会議員さんに自分たちが勉強して思ったことをはっきりと伝えよう。」と伝えた。子どもたちは驚いていたが【資料8】A児の社会日記にあるように、避難生活時の物資の不足を問題とし、問題を追究していこうとする姿が見られ始めた。

- ・水の量を2倍に
 - ・ライター100個
 - ・椅子100脚
 - ・薪(ご飯を炊くために必要)
 - ・カップラーメン500個
 - ・ウェットティッシュ
 - ・水をろ過する装置
 - ・座布団
 - ・ヘルメット等、身を守る物100個
 - ・イオンなどの店を開けてほしい
- 【資料7】 市に要望したいこと

話し合いを通して、やっぱり足りない物が多いと感じた。

防災倉庫を見たとき、とても物が少ないような気がした。あの量で避難してきた人が2、3日もつのか不思議だった。物資が足りなくなったらどうするのか、市議会議員の人に聞いてみたい。

【資料8】 第4時終了時のA児の社会日記

(4) 鈴木議員に相談してみよう (第5、6時)

第5時では、ゲストティーチャーとして鈴木市議会議員をお招きした手だて②。まず始めに前時に考えた自分たちの要望を鈴木議員に聞いていただいた。子どもたちは、カイロ、ライター、充電器、ウェットティッシュ、水、食べ物、防災倉庫が必要であると訴えた。



【資料9】 鈴木議員

子どもの意見を聞いた鈴木議員は、市議会議員という職業の役割、議会と市の行政との関わり合いについて教えて下さった。その後、防災倉庫の値段を紹介しながら、税の使い方について話をしてくださった。子どもたちの提案を賞賛しながら、限られた財源を使って岡崎市全体のことを考えると、一度に準備できるものが限られること、たくさん購入しても限られたスペースに保管しなければならないこと、賞味期限の問題等で物品を定期的に入れ替えていかなければならないことなどを話してくださった。市では限られた財源を最大限有効活用するための方法について考えていることを理解した。【資料10】は第5時のA児の社会日記である。

防災倉庫はたくさんあると便利だけど、増やすのは簡単ではないことがよく分かった。でも、南海トラフ巨大地震の被害がこの辺りにも多いと分かったから、実際に地震が起きてしまったら物資は足りるのだろうか？大丈夫かな・・・。

【資料10】 第5時A児の社会日記

鈴木議員の話から、行政に対する理解が深まり、予算の使い方を考えると、自分たちの思い通りに備蓄品や倉庫を増やすことができないと理解したうえで、災害時の物資不足に対する不安な気持ちも読み取ることができる。公助の限界に気付き、問題解決の困難さに直面していることが分かる。

第6時の導入では、【資料11】前時の授業後に鈴木議員から頂いたメールを紹介した。自分たちが要望したことを市議が市に働きかけてくれたこと、その中のウェットティッシュについては、行政でも検討されていた内容であり、今回の授業がきっかけとなって、防災倉庫に備蓄されるようになったことを子どもに伝えた。子どもたちは、自分たちの学びが行政に影響したことについて驚きと喜びを感じていた。

続いて、前時の鈴木議員の話を振り返り、市民、議会、行政がどのように関わりあっているのかノートにまとめ直し、行政の役割についての理解を深めさせた。

その後、手だて③鈴木議員の話をもとに、再度「市の防災対策はこのままで大丈夫なのか」について話し合いを行った。【資料12】はこの時の授業記録である。

始めにクラス全員に心配か大丈夫かを尋ねると、心配が22人、大丈夫が14人（欠席2人）と、大丈夫と考える子どもが前回よりも多くなった。

C11、C12のように鈴木議員に聞いた行政側の意見を共感的に捉える子どもが増えたからだ。それに対し、災害時の物資不足を問題視する子ども（C15～C20）が心配と発言をしていた。これらの意見によって、問題は解決されていないことを全体の場で確認することができた。また、前回の話し合いに比べ、市民全員のことを考えた発言（C19）や行政側の考えを踏まえた発言（C20）が見られ、子どもたちが多面的に問題を捉えようとしていることが分かる。しかし、解決しなければならない問題と理解しつつも、解決案が見いだせないため、子ども達の気持ちが沈みかけた。そこで、「地域の人は防災についてどのように考えているか聞いてみよう」と話し、次時の学習につなげた。【資料13】は授業後のA児の社会日記である。問題を楽観視せず、問題の解決を目指そうとする気持ちが日記に表れている。

「先日の授業で要望がありましたウェットティッシュについて、関係所管に小学生から要望があることをお伝えしたら、今現在、市役所に準備されており、今後備蓄倉庫に展開する予定とのことです。但し、各地域全員分ではありませんので、家庭内備蓄にそなえてほしいとの言葉もありました。これも授業の成果と感じます。」

【資料11】 鈴木議員からのメール

- C10 イオンと提携しているから大丈夫。
- C11 市が私たちのためにいろいろ対策してくれる。(から大丈夫)..
- C12 市が私たちのために税金を使っている。(から大丈夫)..
- C13 大丈夫。水はシビックセンターで賄える。
- C14 今後、整備されていくから大丈夫。
- T10 じゃあ、心配と思っている子はどんな理由。
- C15 水は足りないと思う。
- C16 心配。避難する場所によって防災倉庫がない。
- C17 倉庫に備蓄されているけれど、熊本地震は物資が不足した。
- C18 イオンと提携しているけれど、市民全員分の物資は足りない。
- C19 たくさんの人を救うためにはもった物資がいると思う。
- C20 お金の問題があるけれど、物資は足りないと思う。
- C21 それぞれの防災施設が、もしもの時に役立つのか心配。

【資料12】 第6時の授業記録

(5) 総代会長佐藤さんに相談してみよう

(第7時)

第7時では、羽根学区総代会長の佐藤さん

をゲストティーチャーとしてお呼びし、手だて④学区の方の防災に対する考えを伺った。佐藤さんは救護や防犯など、各町内の災害時における防御体制の仕組みを話して下さった。さらに、災害時の役割分担を明確にするためのビブスや、プールや池の水を飲用水として活用するための浄水器の購入を市にお願いし、市から補助してもらった話をしてくださった。地域の防災活動に市が関わっていることや、地域の人が市に働きかけていることを学ぶことができた。【資料15】はA児の社会日記である。身近に住む人たちが地域を守るために活動することを知り、自分のできることを行っていかなければいけないという気持ちが高まっていることが分かる。地域社会の一員としての自覚が高まり始めている。

市と市議会議員の関係が大事なことを知った。市民の思いを市議会議員が市に伝えてくれるということは、選挙で選ぶ人によって、伝わりやすいかそうでないかが決まってくるんだと思う。やっぱり今のままでは防災対策は大丈夫ではないと思う。私の家は勉強するまで、災害時の準備をしていなかった。私みたいな家が少なからず他にもたくさんあると思う。

【資料13】 第6時A児の社会日記



【資料14】 総代会長 佐藤さん

確かに自分の地域でも防災訓練をやってお母さんも参加していた。でも、自分がやらなきゃ意味がない気がする。町内ごとに防衛隊という組織が、何か災害が起きてしまったときに、私たちのために動いてくれることが分かった。けどやっぱり自分たちにはできることは少しずつでもしていかなければ、他人に任せっきりにになってしまう。

【資料15】 第7時A児の社会日記

(6) 婦人自主防災クラブ会長赤平さんに相談してみよう (第8、9時)

第8時では、手だて④羽根学区婦人自主防災クラブ会長の赤平さんに防災活動についての話をいただいた。始めに、赤平さんが準備している避難リュックの中身を見せて下さった。水、非常食、常備薬など自

分が必要な物をしっかり準備していることや、飼っているペットを守るために両手が使えるリュックを使用している工夫を教わり、ペットを飼っている子ども達は赤平さんの話に高い関心をもっていった。

続けて、リュックの中に入れていた非常食と同じものを子どもたちに配付して下さった。非常食には、煮干し、昆布、ごま、チョコレート、飴が入っていて、その場で子どもたちに食べさせた。飴やチョコレートを食べながら、「煮干しや昆布は好きじゃないからな。」とつぶやいた。それを聞いた赤平さんが「私は煮干しが好きだから入れているので、日持ちするもので好きな食べ物を非常食にすればいいよ」と話して下さった。

授業の終盤では、赤平さんへの質問コーナーを設けた。ある子どもが「大災害が起きた場合、家が崩れなければ自宅で過ごすと思っているのですが、それは大丈夫ですか。」と尋ねた、すると赤平さんは「すばらしい質問なので、私より専門家に聞いた方がいいと思います。なので、今から消防署の署長さんに聞いてみましょう【資料16】。」と言い、署長さんに電話をかけて下さった。突然のことで本人はもちろん、クラス全員が驚きを隠せなかった。署長さんからは、「家にいてもいいが、非常食とラジオを用意しておくといい。また避難所に行けば様々な人と連絡をとれるため、避難所も活用するといい」と話して下さった。



【資料16】赤平さんと消防署署長に電話をかける子ども

最後に話のまとめとして、赤平さんが身に付けているジャンパーや子どもたちが食べた非常食は、婦人自主防災クラブの活動費の一部が使われており、その活動費は市の予算の中に含まれていることを教えて下さった。赤平さんの活動や本時の授業で使われた物に行政や税金が関係していることに子どもは驚いていた。また、赤平さんのように自分が活動しているからこそ、市に要望したいことが明確になることや、市からも認めてもらえることも理解することができた。【資料17】はA児の社会日記である。

- ・どこでもそうかもしれないけれど、防災対策はしっかりされていることが分かった。そしていろいろなところが協力して今の防災対策があると知った。(市、消防署、総代会長、婦人自主防災・・・など)
- ・いろいろな協力があって私たちは守られている。だからその分、私たちがまかせっきりにならないように、自分たちで準備しておかないといけない。実は税金がかなり大事だと今日改めて知った。

【資料17】 第8時 A児 社会日記

赤平さんと交流を通して、学区に住む人の命と生活を守るために、市や地域住民が協力し合いながら防災の強化に努めていることを知った。そして、物資不足という問題は、各個人の努力(自助)も必要であることに気づき、前時まで答えを見いだせず困っていた子どもたちにとって、解決の糸口となったようだ。

(7) 災害から身を守るために必要なことを提案しよう (第10、11時)

前時のA児の日記から分かるように、地域社会の一員としての自覚が高まっていると感じた。そこで、先日自分たちの提案によって、防災倉庫にウェットティッシュが導入されたことを再確認し、「これまでの学びを基に、もう一度市に必要だと感じることを提案しよう」と声を掛け、話し合いを始めた。この時、手立て④赤平さんに授業に参加してもらい、子どもたちの提案を聞いてもらった。【資料18】は「市に提案すべきこと」について話し合ったときの授業記録である。

提案意見の中の「犬や猫の餌」「車いす」「電子辞書」「外国語パンフレット」(C6～C12)は災害時に軽視されてしまいがちな人や動物の立場に立った意見と言え、第5時の鈴木議員への要望の際には見られなかった。佐藤総代会長さんや赤平さんが地域に住む様々な方を救うために努力されている話を基に、自分たちもできるだけ多くの人を救いたいという思いから、災害時に自分たちより困る人の立場に立って考えた発言と言える。A児も「施設の耐震化」を要望しており、移動に困難を感じる人を救いたいという思いと、個人の力では解決できないという思いを踏まえた要望である。また、C2が「ドローン」について

T2	何をお願いしよう
C1	水
C2	ドローン
C3	段ボール、仕切りに使えばプライバシーを守れる
C4	犬や猫の餌
A児	病院などの施設の耐震化
C6	車いす
C7	外国人に伝えるための電子辞書
C8	ドローンを使えば、物資が道路が崩れても物資が運べる
C9	ドローンに反対。飛ぶ時間が限られる。落ちる可能性もあるし、誰が操縦する？
C10	救急箱
C11	ラジオ
C12	外国語のパンフレット
C13	耐震化に賛成。入院患者はすぐには逃げられない
C14	ドローンに賛成。いろいろな被災地で使われているし、バッテリーも長持ちするらしい
C15	段ボールは物資を包むのに使われているから、わざわざ用意する必要はない
C16	導入に費用がかかり過ぎると思うからドローンには反対
C17	外国語パンフレットは大事だと思う
A児	電子辞書は必要。避難生活において、コミュニケーションがとれることは大切
C18	ペットの食べ物は、ペットを飼っている人しか使わない。人はペットの食べ物を食べたくない
T4	みんなペットフード配られたら食べる
C19	悩む。他になければ食べるけど、食べたくない

【資料18】 第11時授業記録

は、C 8、C14のように、ドローンの利便性を生かして導入に賛成する子どもがいれば、C 9、C16のように、活用方法、費用といった問題点を指摘する子どももいた。子どもたちは一人一人の意見を大切にしながらも、予算の面や導入後に活用していけるのかを吟味し、要望すべきかどうか話し合いを進めた。C18の「ペットの食べ物はペットを飼っている人しか使わない」という発言は、生活や命を守るために地域社会で用意すべきものなのか、個人で用意すべきものなのかを考えている発言である。

意見が出たところで、「今までの学習で分かったと思うけれど、予算には限りがあり、一度にすべてを叶えることができないよね。どの要望を最初にお願いした方がいいのかな。」と尋ねた。自分の考えを変えたくない思いから、「ドローン」にこだわる子どももいたが、多くの人を救うことができ、必ず必要となる「水」についての要望をすべきという意見でまとまった。中には、貯水槽のような施設の拡充を求める子どももいた。

最後に赤平さんが「防音室は救援物資で使った段ボールで作ることができる。工夫次第で自分たちで作れるものもある。ただし、自分たちが考えたことを市に要望していくことが重要です。小学校6年生のみなさんが、こんなに様々な考えをもっているとは知りませんでした。みんなの意見を市に掛け合ってみますね。」と話して下さった。自分たちの学びを評価していただくと共に、考えを発信していくことの大切さを感じていた。**【資料19】**はA児の授業日記である。

- ・〇〇さんが言った通り貯水池を増やした方がいいと思った。水はいろいろな場面で使うからすぐに足りなくなりそう。電子辞書もあるといい。相手が言って分からないことが調べられる。英語が通じる人がいれば、通訳してもらえりけど。
- ・考えると足りない物が複数ある。でも、自分たちで用意できるものが多いから、自分たちで用意した方がいいと思う。

【資料19】 第11時A児の社会日記

行政が全ての物資を準備することはできないという事実を理解し、自分にできることをする（自助）の大切さを理解していることが分かる。その上で、より多くの命や生活を守るために、何を市に要望すべきかを考えている。様々な立場から問題について考え、解決策を見出そうとする姿が見られ、これこそ、よりよい社会の実現を目指して、地域に参画しようとする姿だと言える。

6 研究の成果と課題

(1) 仮説①に関する成果

手だて①については、大災害を経験していない子どもたちにとって、南海トラフ巨大地震のシミュレーション動画の視聴によって、地震に対する危機意識を高めることができた（P 4 **【資料2】** A児社会日記）。また、第11時の話し合いの中のドローンの導入について話し合う際には、熊本地震の事例を根拠とし、ドローンの必要性を訴える子どももいた（P 7 **【資料18】** C8の発言）。2つの事例を導入で学習したことが、単元の後まで生きていることが分かり、それだけ子どもを引き付ける教材となったと言える。

手だて②について、校内の防災倉庫に視点を向けることで、市の防災に関心をもつことができた。防災倉庫の中身の確認や、鈴木市議会議員から防災についての話を聞いたり、自分たちの思いを伝えたりする場面を設定したことで、行政の役割を理解すると共に、災害から人の命と生活を守ることの難しさに気付くことができた（P 5 **【資料10】** A児社会日記）。

(2) 仮説②に関する成果

手だて③は、行政の課題に気付いた子どもとそうでない子どもが話し合いをしたことによって、行政が努力しても熊本地震と同じような被害が起こりうることを全体場で確認することができた。簡単に解決できない問題でないことに気づき、悩みながらも問題に立ち向かう姿が見られた。（P 6 **【資料13】** A児社会日記）

手だて④について、地域の方が同じ問題に立ち向かっている姿を見ることができ、問題を解決するためのヒントを得ることができた。また、第11時で赤平さんの前で話し合いを行い、赤平さんにも意見をいただいたことによって、地域の方と共に問題を解決しようとする態度を育成することができた。地域社会の一員である自覚を高め、よりよい社会の実現のために自分の意見を発信しようとする姿が見られた（P 7 **【資料18】** A児の発言）。また、意見の発信だけでなく、自分のできることをしていかなければならないことにも気付くことができた（P 8 **【資料19】** A児社会日記）。よって、手だて④は有効であったと言える。

7 おわりに

本実践を通して、多くの人の立場に立ちながら問題の解決を目指す姿が見られた。問題を解決するために様々な人から話を聞いたり、自分の考えを主張したりするなど、社会に参画しようとする姿が見られた。防災倉庫にウェットティッシュが配置されることになり、子どもたちは社会に参画することへの達成感も感じることができた。今後も地域社会の一員として、発言や行動する姿が見られることを願っている。